

〔論 文〕

オックスフォード大学図書館の再建者：
トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズ
——イギリス図書館思想の研究——

藤 野 寛 之

「イギリス図書館思想の研究」と題する本研究の目的は、エリザベス一世の治世期である16世紀から現代に至る図書館思想史の再検討である。図書館員とその関係者が図書館につき何を考えたか、何を試みたかの記録を新たに掘り起こそうとしており、本研究で採録される人物には、哲学者、思想家、文人、出版人その他も含まれる。イギリスでは、20世紀後半以降、この領域についての新たな研究が活発に行われている。ケンブリッジ大学出版会の『ケンブリッジ・イギリス・アイルランド図書館史』、『ケンブリッジ・イギリス図書館史』、雑誌『図書館と情報の歴史』での研究成果などがその例である¹⁾が、2004年にオックスフォード大学出版会から刊行された『オックスフォード・イギリス伝記事典』(全61冊)には、図書館員その他関係人物約150人分の項目が参考資料(図書・論文・死亡記事・書簡など)とともに採録されている²⁾。本研究ではそれらの資料もできるかぎり参照する。

本稿では16・17世紀の「ボドリー図書館(Bodleian Library)」を扱う。この時期は、図書館の「原点」を模索した時代であり、「ボドリー図書館」においては「パブリック・ライブラリー」という言葉が、すでに「公開図書館」の意味で使われていた。本稿は「ボドリー図書館」の基盤を創りあげたトーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズの経歴・取り組み、両人の書簡の記載内容などをたどって、なぜこの時期にこの図書館がイギリスで出現したのかを考究する試みである。なお「イギリス図書館思想の研究」につ

いては今後も継続して執筆・発表してゆく予定である。

I トーマス・ボドリーの教育と外交官時代

外交官でオックスフォード大学「ボドリー図書館」の設立者トーマス・ボドリー(Sir Thomas Bodley, 1545-1613)は、1545年3月2日にエクセターのハイ・ストリートとガンデイ・ストリートの交差点の家で、宗教の急進派でエクセターの出版業者ジョン・ボドリー(c.1520-1591)とその妻でデヴォン州オタリー・セント・メアリーのロバート・ホーンの娘ジョーン(1586年没)の間の長男として生まれた。弟にはローレンス・ボドリー(1547/8-1615)およびジョシアス・ボドリー(1550-1617)がいた。プロテスタント教徒の改革に加担したと見なされたジョン・ボドリーは、メアリー一世の治世期のおそらく1555年に国を捨て、一家とともにヴァーゼル、次いでフランクフルトに居を定めた。家族は、父と母、叔父のニコラス、子どもは息子のトーマスとジョシアスとローレンス、娘のプロテシア、三人の召使い、ジュネーヴのイギリス教団の幹事であるジョン・ボドリーから預かった9歳の息子のニコラス・ヒラード(画家, 1547?-1619)がいた。

トーマス・ボドリーが初期の教育を受けたのは、宗教改革者ジャン・カルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564)の「ヒエロポリス(Hieropolis)」³⁾であった。彼はフランス人医師

= 学校長のフィリベール・サラサン (Philibert Sarrasin) の家に寄宿していた。カリキュラムにはラテン語とヘブライ語が含まれ、辞典編纂者のロベール・コンスタンタン (Robert Constantin) とともにホメーロスを読んでいた。学生名簿に名前は出ていないが、1559年6月からはジュネーヴ・アカデミーで学んだ。こうして、彼は自分を「ヘブライ語についてはシェヴァリエ (Chevalierus)、ギリシア語ではベロウルドゥス (Beroaldus)、神学ではカルヴァンとベーズ (Beza) の聴講生」と見なしていた。メアリー女王の死後、ジョン・ボドリーは1559年9月5日に家族とロンドンに戻り、その年の末には服地商で働いていた。

トーマス・ボドリーは1559年にオックスフォードのマグダーレン・カレッジに入学した。彼は、同じくメアリー時代の亡命者でオックスフォードのカルヴァン派の旗頭であるローレンス・ハンフリー (Laurence Humphrey, 1527?-1590) の指導のもとにおかれた。1563年に学士として卒業すると、同年にマートン・カレッジの研究助手となり、1564年には正規の研究員に受け入れられた。才能と関心領域の幅広さで彼の学業は際立っていた。マートン・カレッジが当時のオックスフォードでカリキュラムの枠を超えた指導体制で進んでいたこともあり、1565年に彼はギリシア語の最初の講師に任命されていた。ボドリーのヘブライ語の知識は進歩し、大学の証書を翻訳するまでとなり、ヨハネス・ドルシウス (Johannes Drusius) が1572年から1576年にカレッジのヘブライ研究の職を引き受けた際にはその協力者となった。言語の才能は確かであり⁴⁾、詩文のヘブライ語訳まで引き受けて、学外でも知られる存在となっていた。1566年に修士号を取得すると、外部のいくつかの学校で「自然哲学 (Natural History)」を教えるようになった。後々の業績と照らしてみると、マートンでの彼のもう一つの功績は、大学図書館の再建に向けて主たる助言者となっていたヘンリー・サヴィル (Sir Henry Savile, 1549-1622) との間に一生にわたる友人関係を

作りあげていった点にあった。

1576年にボドリーは「海外への旅行と滞在から現代語の知識を身につけ、様々な事態に対処できるようにしたかった」ため、オックスフォードを離れることにした。1576年9月に認可を得ると、まずフランスに渡り、その後の四年間をドイツとイタリアで過ごして、イタリア語・フランス語・スペイン語がしゃべれるようになっていた。帰国後マートンに戻って、上級研究員として1586年までの三年間を過ごしたが、レスター伯爵 (Earl of Leicester, 1532?-1588) や外務大臣のフランシス・ウォルシンガム (Sir Francis Walsingham, 1530?-1590) の庇護のもとにますます国政に関与するようになっていた。1583年ごろにはエリザベス一世のもとで侍従に任命され、1584年にはポーツマス選出の国会議員となっていたが、国内政治にあっては、それほど目立った政治家ではなかった。ヨーロッパに滞在の間、ボドリーは外交問題に関与するようになり、これが彼の主たる政治課題となっていた。1579年にはパリの大使館付きに任命され、その言語能力により大使のヘンリー・コバム (Sir Henry Cobham) に信頼された。最初の主要な外交任務は、1585年4月から7月のデンマークへの派遣で、デンマークとヘッセン公国との間の調停であったが、これは功を奏しなかった。1588年5月には、国王アンリ三世によりパリから追い出されていたギーズ公アンリー一世のもとにエリザベス一世の親書を携えて密かに訪れ、これがギーズ公の決定的な没落につながっていた。1588年8月にはデンマーク国王とハンブルクの商人団のもとに派遣され、スペインのアルマダ (無敵艦隊) を支援しないよう説得に出向いていた。

こうした外交任務の間に、ボドリーは、1586年7月19日にブリストルのリチャード・コーリー (Richard Cary) の娘アン (1564-1611) と結婚していた。相手は富裕な漁業商人でデヴォン州トトNZの市長ニコラス・ボール (Nicholas Ball) の未亡人であった。ボドリーのその後の生涯の基盤となったのは、主として、裕福な商人

Mar. 2015

オックスフォード大学図書館の再建者：トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズ

の彼女の父親から受け継いでいた資産であり、加えて彼自身の父親から1591年に受け継いだ1000ポンドの資産であった。二人には子どもがいなかった。フランスから帰国して間もなく、彼は連合諸州駐在のエリザベス女王の大使という重要な役割で派遣された。1588年12月から1597年初期までずっとハーグに住んでいたが、この間に父親の死と弟の死のために短期間帰国した。1589年5月には彼の任地に赴く船の手配はあったが、アン・ボドリーがいつまでハーグに滞在していたかは不明である。ボドリーの役割はこの地でのイギリスの同盟関係の維持であり、スペインに対抗するための軍隊の派遣についての協定の改定などであったが、本国でのソールスベリー伯爵ロバート・セシル (Robert Cecil, 1563-1612) とエセックス伯爵ロバート・デヴェロー (Robert Devereux, 1591-1646) との確執は彼の任務にも影響をもたらしていた。エリザベス女王のもとで政治の世界での出世は望めないと知ったため、さらに、病気が原因で、連合諸州大使の役を1597年に辞退した。ロバート・セシルからは女王の秘書官への就任という提言があったが、これは彼のほうから断った。

II ボドリー図書館の設立

ボドリーがすべての要請を拒否したのは、かねてからの願望であった母校オックスフォード大学の図書館再建のためであった。オックスフォードは、イングランドでも最も古い町の一つで、中世期にはすでに学生が共用で使える図書コレクションが、学内の聖メアリ教会にあった。1320年ごろから1327年にかけてコバム司教の寄付により、学生の利用が増えたが、図書館の蔵書はカトリック教とプロテスタントの教義の対立に災いされて、16世紀半ばにエリザベス一世が即位するまで放棄されていた。「ボドリー図書館」としてオックスフォード大学の中心に位置するようになったのは、時代の要請でもあった。

「学生たちの公的な利用にとって、そのあら

ゆる部分が破壊され、無益になっているのを復旧する以上の役割はわたしには考えられない」。言語と学識の背景、資産、影響力を持つ関係者たちのため、ボドリーは自分がこの仕事を実行するのにふさわしいと感じていた。こうした資格は、自分の資金と「他からの寄付によって図書を提供する手段を提案し」図書館を復活させようとする、この重大な試みを通告した1598年2月23日の大学副総長トーマス・シングルトン (Thomas Singleton) 宛ての彼の書簡に明言されていた。この提案が大学の理事会で了承されると、事態は急速に進んだ。3月19日のボドリーの書簡には復活祭までにサヴィルが提出する再建計画を審査する委員会の設置が提言されていた。ボドリーはすでに最新型の書架の導入を決め、資材を注文していた。ボドリーはロンドンに住んでいたため、サヴィルを中心にして計画の具体案が取り決められた。1610年6月12日には委員会の仕事は副総長ジョン・キング (John King) をリーダーとする管理者グループに引き継がれた。

図書館の改装は、初代の管理者となったトーマス・ジェームズ (Thomas James, 1572/3-1629) に宛ててボドリーが1599年12月に書いた手紙には、二・三か月で終わるであろうと書かれていた。その後、ボドリーの生涯の最後まで続いたジェームズ宛ての手紙は、図書の収集、目録と分類、建築、保存、清掃、来館者への対応に至るまでの、図書館管理のすべての局面が記されていた。それは図書館運営のマニュアルであり、一大図書館の誕生についての創設者の観点からの独自で詳細な記録であった。1602年6月にボドリーは副総長への書簡に、建設は完成に近づいており、これからは「図書の収集」を急がねばならないと書いていた。広報への姿勢と利用者心理への理解は、開設当初からこの図書館を有名にしていた。1600年6月に副総長に報告した最初の寄贈コレクションは、1596年にエセックス公がファーロの監督教区からもたらした図書であった。

ウィリアム・カムデン (William Camden,

1551-1623) やロバート・コットン (Sir Robert Cotton, 1571-1631) その他何人かの古文書収集家が寄贈者であり、さらに、トーマス・アレン (Thomas Allen, 1542-1632) とかトーマス・ジェームズといった研究者や図書館員たちの努力で、修道院図書館の手を離れた多数の写本が個人の収集家を通して公的な利用へと移行するようになっていた。寄贈の多くが資金そのものであり、それはボドリー個人の資金とあいまって、創始者に大胆な収集方針を許していた。この点でボドリーは独自の選択眼を持っていたが、自分のために働く図書販売業者にも依存していた⁵⁾。ジョン・ノートン (John Norton) は年に二度フランクフルトで開催されるブック・フェアから入手していたし、彼の徒弟のジョン・ビル (John Bill) は1602年から1604年にかけて、パリやフランクフルト、セヴィリアなどの多数の町に図書購入の旅行で出かけていた。ボドリーの視野はヨーロッパ諸国の言語をはるかに超えており、ヘブライ語の印象的なコレクションを作りあげ、「アレppo商人団」の領事ポール・ピンダル (Paul Pindar) といった後援者を通じてボドリーは、他の収集家が手を広げなかった、シリア語・アラビア語・トルコ語・ペルシア語・中国語の作品を1604年ごろから獲得していた。

ボドリーは、図書館の開館以前に相応な蔵書コレクションを作りあげておくべきだと考えていた。1602年11月8日に公開したときには2000冊を所蔵していた。図書館ができた最初の二年には22名の外国人が来訪していた。蔵書はさらに増えた。ボドリーの書簡の第一の関心事はいまや図書の配置と分類であった。蔵書の拡大に対するボドリーの究極の活動は、1610年12月に用度局 (Stationers' Company) がそこに送りこまれるすべての本を一部ずつこの図書館に送付するとの協定を取り決めたことにあった。これはイギリス国内の図書の法定納本であったが、ボドリーとしては、この措置により「役に立たない本」までが入ってくるのを恐れていた⁶⁾。当時、大型の本については鎖でつないで

管理する方式を採用する図書館が多かったが、納本制度によりロンドンから入ってくる小型の本は、鎖につながれることなく並べる置き場を別に必要としていたので、それを飾る場としてのギャラリーがイギリスで最初に作られた。

当初、ボドリーは蔵書と施設を自分の資産でまかなうことにしていたが、寄贈・遺贈のコレクションが増え、その書架が必要となったため、図書館の増築のための基金を公募するよう大学当局に働きかけ、方形造りの新館をその生前に完成させていた。

晩年にボドリーは結石で苦しんでいたが、1612年6月には侍医により水腫と壊血病と判断され、オックスフォードに住むことはあきらめ、1613年1月にロンドンのパーソロミュー病院に隣接する自宅で亡くなったが、夫人はすでに1611年に亡くなっていた。遺骨はオックスフォードに運ばれ、マートン・カレッジの礼拝堂で葬儀が行われた。遺言により弟のローレンスと姪のエリザベス・ウィリスには20ポンドずつが遺贈されたが、7000ポンドあったといわれる資産はそっくり執行人に任された。

ボドリーの死後、その図書館は様々に評価された。1608年に書かれ、死後の1647年に刊行された「自叙伝」には、外交官としての生涯を遮断され、世俗の出世を捨てた次第が語られていたが、生きる道をその才能と学識と資産の有効利用にかけていたことだけははっきりしていた。評者によっては、彼の図書館が「反カトリック思想」の表現であると見なしているが、それを信奉する司書ジェームズの考えを必ずしも受け入れなかったボドリーには、はるかに広い人文科学全般への尊重が見られる。それがオックスフォード大学図書館のために残した彼の最大の遺産であった。

Ⅲ 司書トーマス・ジェームズの生涯

ボドリー図書館の司書で宗教論争家のトーマス・ジェームズは、その息子の説明によれば、おそらく、1549年6月29日に結婚していたが、

Mar. 2015

オックスフォード大学図書館の再建者：トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズ

メアリー女王の弾圧により海外で暮らさざるを得なかったリチャード・ジェームズ (Richard James) とジェーン・オーヴァーナン (Jane Overnone, 1581年没) がイギリスに戻って住んでいたワイト島のニューポートで夫妻の末の息子として生まれていた。姉のメアリーが後の高等法院判事トーマス・フレミング (Thomas Fleming, 1544-1613) と結婚しており、ジェームズがまず1586年に13歳でウェストミンスター・カレッジに入り、その後、1591年6月30日にオックスフォード大学のニュー・カレッジの候補生として認められたのもフレミングの支援のおかげであった。1592年には正規生となり、1595年3月3日に学士として卒業すると、1599年には修士課程を終えた。

このころまでにジェームズの多数の著作のうちの最初の作品、イタリアの改革者アントニオ・ブルチオーリの『ソロモンの歌』の翻訳(1598)⁷⁾、および、ギョーム・デュ・ヴェールの作品『ストア派の道徳哲学』(1598)⁸⁾の翻訳が彼の言語学の多才さを示していたが、後にトーマス・ボドリーはジェームズのヘブライ語の訳文の過ちを見つけていた。リチャード・ド・ベリー『フィロビブロン』⁹⁾の版がオックスフォードで印刷されたのも1598年であり、ジェームズはその翌年の新版には写本リストを付け足し、トーマス・ボドリーへの献辞も付していた。そのなかでジェームズは、ケンブリッジを訪問してから別の写本目録を刊行すると約束していた。1599年にはボドリーが再建する図書館の司書にジェームズを選んでおり、現存する12月24日付けの最初のボドリーの書簡は、ケンブリッジから彼に宛てて書かれていた。約束した目録『オックスフォード=ケンブリッジ選定目録』¹⁰⁾(1600)は、オックスフォードとケンブリッジのカレッジ、ならびに、ケンブリッジ大学図書館の写本の総合目録であった。ジェームズはさらに、オックスフォードの規約集の再編集と筆写に取り組んでいた。この仕事のため1601年2月には6ポンド13シリング4ペンスが支払われていた。

ジェームズの任命は、1602年4月13日に大学当局に認められ、年給はこの年に26ポンド13シリング4ペンスに引き上げられ、ボドリー死去の1613年には33ポンド6シリング8ペンスであった。ジェームズ宛てのボドリーの手紙は次第に多くなり、図書館管理者ジェームズへの指示はますます細くなる。「図書館に対する細々としたわたしの空想まで貴兄に伝えたくならざるをえない」。ジェームズの兄エドワードへの私信には結婚への意見までもが述べられていたが¹¹⁾、1601年9月までにジェームズは結婚の意思を明かしていた。その後ボドリーは引きさがったが、ニュー・カレッジの奨学金を辞退させ、家計への損失という結果を与えていた。ジェームズは1602年9月14日に、オックスフォードの聖オールデイト教会の主任牧師に任命され、10月18日に聖トーマス教会でアン・アンダーヒル (Ann Underhill, 1581年洗礼, 1655年没) と結婚した。

「ボドリー図書館」は、盛大な行列と図書館長の講話とともに、1602年11月8日に開館していたが、ボドリー自身は出席しなかった。ロンドンに留まった彼は、図書館のために図書を購入し、気ままに製本させて、目録作業と配架のためジェームズに送り、ジェームズは手書きのリストをボドリーに送っていた。ボドリーの費用負担で1604年の6月から10月にかけて、ジョセフ・バーンズ (Joseph Barnes) により印刷された総合目録の編纂は、ジェームズがもっとも苦心したものであった。1605年半ばに完成した『トーマス・ボドリーによる旧オックスフォード・カレッジの公開図書館の図書目録』¹²⁾は、ボドリーが国王ジェームズ一世よりも支援を期待していた、ヘンリー王子に献呈されていた¹³⁾。

この仕事が完了し、1606年に図書館の副館長に任命されると、ジェームズは古くからの関心事である、ローマ・カトリック神学者たちが故意に歪曲していた写本や印刷テキストの詳細な再検討による「校合」に取り組むことにした。これはジェームズの『法王の闘争』¹⁴⁾(1600)

のテーマであり、初期の写本目録作成の動機であった。1607年ごろには『神学徒=オックスフォード公開図書館 (*Publike Librarie*) 管理者トーマス・ジェームズによる、様々なやり方での古代教父の著作の剥奪についての改善のささやかな願い』¹⁵⁾という単著のパンフレットを刊行し、1608年にはボドリーとともに、コーパス・クリスティ・カレッジとケンブリッジ大学図書館の写本を使って、ジョン・ウィクリフ (John Wycliffe, c.1320-1384) の『托鉢修道士の規制に対する小論二篇』¹⁶⁾の刊行に努めた。ボドリーも最初はジェームズの計画に賛同していたが、王室図書館が協力的でなくなるとその熱も冷めていった。ジェームズはバンクロフトの牧師となり、1609年11月6日にはケント州ミドレイの主牧師に任命されていた。ランベス図書館に残されていた手紙のなかで彼は、破壊された写本の復旧をはかるべきだと訴えており、これは多くの者からの賛同を得ていた。神学徒のグループが結成され、彼の指導のもとに1610年6月1日から仕事を始めたが1612年10月には支払いができずに中止になった¹⁷⁾。この短い期間に56篇の写本の校合が終わり、そのうちの半数はボドリー図書館以外のものであった。ジェームズはこの仕事の意義を強調していたが、ボドリーはそれが図書館自体の仕事を阻害するとして軽蔑していた¹⁸⁾。

この間、ジェームズの家族は成長していた。上の子どもたち、トーマスとアンについてはあまり知られていないが、フランシス (1607年生まれ) は父親の後を追ってニュー・カレッジに入り、セオドア (1609年生まれ) はオックスフォード大学のコーパス・クリスティ・カレッジの연구원となった。この息子の洗礼および娘たち、マーサ (1615)、アリス (1616)、メアリー (1619) の洗礼がみな聖メアリー・マグダレーン教会で行われていたことから、一家は当時その教区に住んでいたことが分かる。

IV 「ボドリー図書館」の完成と図書館長ジェームズ

1611年2月26日のボドリーの手紙のとおり、印刷図書の寄託についてのロンドンの用度局と大学当局との間の納本協定はジェームズのアイデアであったことが明らかにされているが¹⁹⁾、その効果は当初、世俗的な図書、特に芝居の台本を嫌うボドリーにより、さらには用度局側の不熱心さにより無効になりかかっていた。とはいえ、その実現は図書館員としてのジェームズのライフワークとなっていた。1613年1月のボドリーの死とともに、ジェームズは、図書館の管理と理事会のための図書の購入に責任を持つようになった²⁰⁾。購入については、理事会はフランクフルト・ブック・フェアの目録と、ジョン・ビルおよびヘンリー・フェザーストーン (Henry Featherstone) といった図書販売の経験者に依存していた。

一方、ジェームズは新たな目録作成作業に従事していた。1605年に刊行した目録は、基本的には図書館の分類にしたがったもので、アルファベット索引が付いていた。1612-13年には著者・書名のアルファベット順による「新たな目録」を編纂した。印刷したものを刊行したかったが資金が乏しいためにジェームズによる手書きのままであった。しかし、アルファベット順の著者目録は『ボドリー図書館図書万有目録』²¹⁾ (1620) として印刷・刊行された。標題紙はジェームズが著者であることを明記していたが、発行者は後継者ジョン・ロウス (John Rous) であった。ジェームズ自身の書簡によれば、彼は情報提供とか筆録といった図書館経営の仕事に忙殺されていた²²⁾。

方形造りの図書館の増設も1613年から1619年の間に進行していた。ジェームズはこの建築にも関心を示していた。全体のデザインはヘンリー・サヴィルに任されていたが、最上階のギャラリーは明らかに彼の責任であった装飾的な彫刻フリーズ (Frieze) で飾られ、内装も配置とともに図書館の内容を表現したものであっ

Mar. 2015

オックスフォード大学図書館の再建者：トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズ

た。そこにはギリシア・ローマの著者、教会の教父たち、外国の改革者、および、同時期のイングランドのプロテスタントの高位聖職者たちが並べられていた²³⁾。

その間にもジェームズは、ほとんど強制されたほどに反カトリックの態度を弱めなかった。その思想は『聖典改悪論』²⁴⁾ (1611)、『イエズス会の没落』²⁵⁾ (1612)、さらにはっきりとオックスフォードシャー州のイエズス会士の追及に現れていた。自分たちの教会への固執はさらに強まり、1617年10月20日にはケント州リトル・モンゲハムの教区牧師に任命されていた。

1620年にジェームズはボドリー図書館長を引退し、その後は、病身の身でありながらも、文献校合の仕事に身を捧げていた。彼の収入は、引退によってほぼなくなったが、1621年6月にはウェールズの副牧師への叙任によって補うことができた。カトリック信徒への最後の攻撃の火ぶたは、1627年に現れた『法王の独断による禁書総索引』²⁶⁾によりなされていた。

ジェームズの晩年について知られているところは少ない。1628年8月11日付けのコットン宛ての書簡には、自分の妻と子どもたちのためにアボット大主教に請願してくれたことを感謝するとともに「これまで長いこと世間の恩恵を受けてこなかった」と書き残していた。彼は1629年8月に亡くなり、ニュー・カレッジ礼拝堂で葬儀があったが、その墓の正確な場所は知られていない。アン・ジェームズは1629年11月14日にオックスフォード大学の総長室で彼の資産の管理責任を与えられたが、同日の家財目録はその価値を219ポンド1シリング10ペンスとしていた。彼の蔵書は、特定されにくかったが、40ポンドの価値があった。アン・ジェームズは1655年6月22日に葬られた²⁷⁾。

ジェームズを「宗教改革以後にオックスフォードで教育された、カトリック教徒に対する最も熱心かつ不屈の筆者であった」として性格づけた研究者ウッズの言葉²⁸⁾はおそらく正しいであろう。彼の反カトリック思想の裏には、彼が攻撃した多くのカトリック教徒による当時

の出版物が、欺く意図ではなく、おそらく不注意から生じており、ジェームズの写本の扱いがより学問的であったとの事実が存在している。こうした扱いは自身の図書館やその他写本の扱いにも現れていた。トーマス・ボドリーの必ずしも協力的でなかった監督のもとで、ジェームズは一大図書館の目録作成作業のなかに、印刷図書と写本の組織化を試みた初期の図書館員でもあった。

V 「ボドリー図書館」の成立とその意義

オックスフォードの「ボドリー図書館」は、時代に即した最新の蔵書管理システムを導入²⁹⁾し、様々な変革を続けているが、現在に至るも「ボドリー」の名のもとで活動している。その基礎を築いたトーマス・ボドリーおよびトーマス・ジェームズの功績は計り知れない。その意義をここで総括しておくことは必要であろう。まず、背景として認められるのは、二人がともにメアリー女王³⁰⁾の時代に大陸への亡命を余儀なくされたプロテスタント教徒の両親の息子であったことで、その後のエリザベス一世の時代での活動は、特にジェームズにあっては反カトリックの思想に貫かれていた。同時代にあっても、宮廷政治はきわめて流動的で、パトロンの政治家が国王の引き立てを失うことで失脚するケースも多く、外交官ボドリーの場合は特にそれに災いされていた。彼が政治の道を諦めて静かな学究生活に入ろうとした機縁もそうしたところにあった。

エリザベス一世の文芸復興期は、こうした二人の活動にむしろ新たな途を開いていた。45年続いた「エリザベス朝」は、劇作家のシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) やマロー (Christopher Marlowe, 1564-1593) を産んだだけでなく、アングリカン教会の基盤を固めた神学者リチャード・フッカー (Richard Hooker, 1554?-1600) を育て、その後起こるウェスリー (John Wesley, 1703-1791) のメソ

ジスト運動の基盤を準備していた。その一方で、数学者のジョン・デー (John Dee, 1507-1608) などが学術の振興に尽くしていた。

さらに、この時代から17世紀にかけては、15世紀にドイツで始まった「印刷術」が定着し、刊本(写本に対する印刷図書)が量的に写本を凌駕する勢いを見せはじめた時期であった。一方では中世の錬金術を記した写本資料を求め、他方では博物学関連の最新の刊行物を取得しようとしていた。前者はオックスフォードのアシュモール (Elias Ashmole, 1617-1692) がその代表であり、後者には侍医で収集家であり、1753年に大英博物館成立の基盤となるコレクションを構築したハンス・スローン (Hans Sloane, 1660-1753) がいた。歴史研究のためには関連する記録を徹底的に探し求めることが必要となり、市民生活の記録ですら後世に残すべき貴重な材料となる。この分野ではイギリスの古くからの典礼や儀式・紋章を集めたウィリアム・カムデンや清教徒革命の記録を残そうとしたジョージ・トマソン (George Thomason, c.1602-1666) がおり、17世紀の市民の日常生活を日記に書き残そうとしていたサミュエル・ピープス (Samuel Pepys, 1633-1703) がいた。個人の図書館を残そうとした貴族やその子孫の数が多かった時期でもあった³¹⁾。こうして「エリザベス朝」から17世紀にかけての時期は、イギリスでもその後の19世紀の「ヴィクトリア朝」となる資料の収集・保存の時期であった。「大英博物館(図書館)」の基礎ができたのはこの時代であり、最大規模の「ボドリー図書館」が創られたのもそうした流れのなかの一現象であった。

ボドリーもジェームズもともに図書館の仕事にその生涯をかけるようになったが、ボドリーとジェームズには27歳ほどの歳の開きがあり、ボドリーが写本中心のコレクションを重視した世代に属していたのに対し、ジェームズは印刷図書(刊本)を視野に入れた「新たな時代」の若者としての図書館コレクションの構築を目指していた。この間にいささかの意見の齟齬はあつ

たものの、二人が共通の理想「貴重な文化財」の後世への橋渡しに生命をかけていたのは事実であって、それを成り立たせるうえで必要な「資金と学識」(ボドリー)と「技能(目録作成, その他)と熱意」(ジェームズ)が併せ備わっていたことがこの図書館の成功の鍵となっていた。ボドリーとジェームズとの書簡によるやりとりは、図書館を構築するうえでの参考資料となりうる。寄贈された図書(テキスト)の真贋について意見を交わしたり、図書を固定するための鎖の入手方法に至るまでが記録されているためであった。時代は変わったが、このような二人の書簡のようなコミュニケーションの全容を示した一次資料は、できるなら翻訳しておいたほうが良いであろう。

こうして、現在でも世界最大規模の、イギリスの国立図書館「ブリティッシュ・ライブラリー (British Library)」に次ぐ蔵書規模を誇る「ボドリー図書館」は、ボドリー個人の資産をかけ、ジェームズの献身的な奉仕のもとに実現していたが、それはこの二人の目的追求の意図にかけた情熱によっていた。さらに、それはイギリスの新たな時代を開拓し、宗教ならびに思想をもって安定させようとの両人の願いの現れでもあった。

最後になるが、特にここで取りあげて考えておきたいことは「パブリック・ライブラリー (Publike Librarie [Public Library])」という言葉である。トーマス・ジェームズが最初にこれを使ったとは言えないものの、この表現が「公開図書館」の意味であったことはほぼ確かである。イギリス人にとって「パブリック・ライブラリー」はもともと「利用者」のために開かれ図書館を意味する言葉であった。オックスフォードの図書館は一般市民にまで広く開放されていた「公共図書館」ではなかった。利用できる者は主として聖職者と学徒に限られていた。とはいえ、図書館はそもそも開放されるべき空間である。16世紀にあっては「写本」はまだ鎖につながれていたものの、それは「利用を促進させ

Mar. 2015

オックスフォード大学図書館の再建者：トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズ

る」ためにそうなっていたと見てよい。「市民のため」とか「公的な資金による」といった意味はまだ付与されていなかったものの、イギリスの図書館思想には「公開」という観念が先だっていたことを知っておく必要がある。この後に続く各種図書館の展開はこの「思想」に依拠していたのであり、その意味でジェームズの「“公開された”図書館(パブリック・ライブラリー)」を見なければならぬ。一見、利用制限があるように見えるその後のイギリスの図書館(会員制図書館、ロンドン図書館、職工講習所図書館など)もこうした意識のもとに作られていた。そもそも「図書館(Library)」とは「複数の図書の集積の場」、すなわち「図書コレクション」であって、図書そのものの価値はそれぞれの内容にあることが、すでに16世紀の「写本」から「刊本」への移行の時期に定義されていた。トーマス・ボドリーとトーマス・ジェームズの間にはいくつかの点で意見の相違が見られた(反カトリック思想、その他)が、それが表立った対立とまでならなかったのは幸いであったと見なすことができよう。

【付 記】

本稿は2014年度阪南大学産業経済研究所助成研究(C)「イギリス公開図書館史の再検討」における研究成果の一部である。

注

- 1) 『ケンブリッジ・イギリス・アイルランド図書館史』(*The Cambridge History of Libraries in Britain and Ireland*, 3vols, Cambridge University Press, 2006. この図書については次の書評も参照のこと、藤野寛之「ケンブリッジ・イギリス・アイルランド図書館史」『図書館文化史研究』日本図書館文化史研究会, 25, 2008, 75-95ページ), 『ケンブリッジ・イギリス図書史』(*The Cambridge History of the Book in Britain*, 6vols, Cambridge University Press, 1999-), 『図書館と情報の歴史』(*Library & Information History*, Maney Publishing, 2009-。[前誌は, *Library History*, Library History Group of the Library Association, 1967-2008.])。
- 2) 藤野寛之「イギリス伝記事典の伝統と変遷: DNBとODNB」『図書館界』日本図書館研究会, 58(4), 2006, 220-227ページ。
- 3) 宗教的な理由で国を追われたイギリス人にとって、宗教改革者カルヴァンがいたスイスのジュネーブはプロテスタント教徒にとって安心できる居住の場であった。
- 4) Clennell, W. H., *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, v.6, p.412.
- 5) Clennell, W. H., *op. cit.*, p.413. ならびに、雪嶋宏一「17世紀英国における図書館の革新」『図書館文化史研究』日本図書館文化史研究会, 29, 2012, 62-63ページ。
- 6) Clennell, W. H., *op. cit.*, p.414.
- 7) Brucioli, Antonio, *A Commentary upon the Canticle of Canticles*, 1598.
- 8) Du Vair, Guillaume, *The Moral Philosophie of the Stoicks*, 1598.
- 9) Bary, Richard de, *Philobiblon*, 1598.
- 10) *Ecloga Oxonia-Cantabrigiensis*, 1660.
- 11) *Letters of Sir Thomas Bodley*, no.50, 8 October 1602.
- 12) *Catalogus Librorum Bibliothecae Publicae Quam vir Ornatissimus Thomas Bodleius eques Auratus in Academia Oxoniensi Nuper Institui*, 1605.
- 13) Roberts, R. Julian, *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, v.29, p.738.
- 14) *Bellum Papale*, 1600.
- 15) *The Humble Supplication of Thomas James Student in Divinitie, and Keeper of the Publike Librarie at Oxford, for Reformation of the Ancient Fathers Workes, by Papists Sundrie Wayes Depraved*, 1607.
- 16) *Two Short Treatises Against the Orders of Begging Friars*, 1608.
- 17) Roberts, R. Julian, *op. cit.*, p.738.
- 18) *Letters of Sir Thomas Bodley*, no.193, 30 October 1610.
- 19) *Letters of Sir Thomas Bodley*, no.201, 26 February 1611.
- 20) Roberts, R. Julian, *op. cit.*, p.738.
- 21) *Catalogus Universalis Librorum in Bibliotheca Bodleiana*, 1620.
- 22) Roberts, R. Julian, *op. cit.*, p.738.
- 23) Roberts, R. Julian, *op. cit.*, p.739.
- 24) *Treatise of the Corruption of Scripture*, 1611.
- 25) *The Jesuits Downefall*, 1612.
- 26) *Index Generalis Librorum Prohibitorum a Pontificiis*, 1627.
- 27) Roberts, R. Julian, *op. cit.*, p.739.
- 28) *Ibid.*
- 29) Heaney, Michael and Cannon, Catriona ed.,

Transforming the Bodleian, Walter de Gruyter & Co., 2012, 237p.

30) メアリー一世 (Mary I, 1516-1558) 『岩波世界人名大辞典』2013, 2862ページ。

31) Clennell, W. H., *op. cit.*, p.415.

参考文献

Bodleian Library: A Guide by Geoffrey Tyack, Reprint, University of Oxford, 2010.

Clennell, W. H., *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, v.6, p.411-415.

Edwards, Edward, *Free Town Libraries*, Reprint, Cambridge University Press, 2009, p.1-224.

Lapidge, Michael, *Anglo-Saxon Library*, Oxford University Press, 2008, 307p.

Macray, W. D., *Annals of the Bodleian Library*, 2nd ed., Reprint, Tiger of the Stripe, 2013, 545p.

Philip, I., *The Bodleian Library in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Clarendon Press, 1983, 139p.

Roberts, R. Julian., *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, v.29, p.737-739.

Savage, Ernest A., *Old English Libraries*, Reprint, Editorium, 2006, p.111-127.

Wheeler, G. W. ed., *Letters of Sir Thomas Bodley to Thomas James*, Reprint, Bodleian Library, 1985, 251p.

Wiegand, Wayne A. and Davis, Donald G. Jr. ed., *Encyclopedia of Library History*, Garland Publishing, 1994, p.482-484.

Wormald, Francis and Wright, C. E., *The English Library before 1700*, Athlone Press, 1959, 273p.

<http://www.bodleian.ox.ac.uk/bodley/about-us/history> (閲覧日：2014年8月11日)

藤野幸雄, 藤野寛之『図書館を育てた人々 イギリス篇』日本図書館協会, 2007, 285ページ。

雪嶋宏一「17世紀英国における図書館の革新」『図書館文化史研究』日本図書館文化史研究会, 29, 2012, 49-70ページ。

(2014年11月21日掲載決定)